

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2021年11月12日

親ガチャとサルトル

今回は、「オレって今、反抗期ど真ん中だもんね。親とか先生に理由なく反抗しまくっちゃうんだもんね」という人には是非読んでもらいたいと思って書いています。

「親ガチャ」という、ちょっとショッキングな言葉が注目されていることを知りました。この言葉をめぐって、ネットなどでは賛否両論が繰り広げられているようです。世間でどのくらい浸透している言葉なのかは知りませんが、もしかして中高生の君たちは普通に使用していたりするのでしょうか。

知らない人のために解説すると、親ガチャの「ガチャ」は、「ガチャガチャ」のガチャです。お金を入れてハンドルをグリグリッと回すとカプセルに入ったオモチャや景品が出てくる自動販売機で遊んだことのある人もいるでしょう。カプセルが出てくるまでどんな景品が当たるのかはわかりません。最近ではオンラインゲームにも「ガチャ」があると聞きました。

そのガチャガチャになぞらえて、自分の親が「当たり」なのか「ハズレ」なのかを「親ガチャ」というのだそうです。「あ～オレ、親ガチャはずれたわ～」などと使用するらしい。親の立場からすれば、何とも不穏当な言葉です。「身体髪膚（しんたいはつぷ）これを父母に受く。敢えて毀傷（きしょう）せざるは孝の始めなり」と「孝（親を敬う心）」を重んじる教を説いた孔子大先生が聞いたら、怒りのあまり卒倒してしまいそうです。

どんな親のもとに生まれたかが、子どもの人生に大きく影響することは事実です。親のもつ遺伝的形質は子に受けつがれます。走るのが速い親から生まれた子どもは、かけっこが得意になる可能性が高くなります。また、自我が芽生える前に子どもは親と密着して長い時間を過ごすわけで、親の価値観は子どもの価値観の形成に強い影響を及ぼします。経済面での関係もあります。日本の大学の中で、学生の親の平均年収が最も高いのは東京大学である、というのは有名な話です。

2ちゃんねる開設者のひろゆき氏は、「親が当たりかハズレかを気軽に言える世の中は健全だ」と言います。子どもは自分を生む親を選べません。ひろゆき氏は、恵まれた環境にいる人は、その環境を当たり前としてとらえ、わざわざ「親ガチャ当たり」とは考えない。親がアル中だったり、まともに働いていなかったり、モラハラまがいの言動を向けてきたりするとき、「親ガチャはずれた」という言葉が、子どもにとって心理的な回避の手段になる、と述べています。

「お父さんからぼう力を受けています。(中略)先生どうかできませんか。」そのSOSを周りの大人たちが受け止めてあげることができずに、小学4年生だった栗原心愛(みあ)さんが父親による虐待で亡くなったのは平成31年1月のことでした。千葉地裁は「尋常では考えられないほど陰湿で凄惨な虐待。心愛さんの人格や尊厳を全否定した」と裁判の中で述べています。食事を与えられず、ホースで冷水を浴びせられたという心愛さんの死因は「飢餓や強いストレスによるショックや致死性不整脈、溺死のいずれかとみられる」と報じられました。

厚労省がまとめた昨年度の全国の児童虐待件数は20万件を超えています。ちなみに昨年度の交通事故発生件数は30万件です。コロナ禍により親子がともに家庭で過ごす時間が長くなったことが虐待件数を押し上げているともいわれています。

親から身体的または心理的虐待、ネグレクト(育児放棄)などを受けている子どもにとって、心がつらくなった時に「親ガチャはずれた」と言葉にすることで、一時的にでもつらさを軽減できるなら、それはアリかもしれない、と思います。また、ひろゆき氏が言うように、気軽に親を批判したり、親に対する不満を他人に話せる環境であることが、虐待の被害から子どもたちを救う手だてとなる側面もあると思います。

にも関わらず、筆者にはどうしてもこの「親ガチャ」には素直に納得できない部分が残ります。道徳的な面での是非を問題にしているわけではありません。親に対する「ガチャ」を意識することは、親への依存の裏返しでもあると思います。その中で「親ガチャ」という言葉に、一種の視野狭窄(しやきょうさ)のようなものを感じてしまうのです。

人がどのような生涯を送るか、何が幸福や不幸の原因となるのか、それに関係する要素は「親」だけではありません。自分が置かれている環境を形成する条件は、どんな地域に生まれるか、どんな友達ができるか、学校の先生はどんな人か、など親以外に起因するものがたくさんあるはずです。

さらに言えば、そもそも君たちが21世紀の日本に生を受けたこと自体が「ガチャ」です。たとえば君が、遠い昔、はるかかなたの銀河に生まれ、カルト宗教の教祖のような悪の皇帝が支配する世界で反乱軍の仲間となり、とらわれたお姫様を助け出し、黒いヘルメットをかぶった大男と光る剣で戦い、小型宇宙戦闘機で敵の巨大な惑星型要塞をぶっとばす人生を送っていたとしても何ら不思議はなかったはずです。

この、おそらく誰でも一度は考えたことのある「私はどうして私なのだろう」という問いに答えようとした人物がいます。連合軍がパリを解放し、ドイツが無条件降伏を受諾してヨーロッパにおける第2次世界大戦が終結した20世紀半ば、実存主義思想運動を提唱したフランスの哲学者ジャン・ポール・サルトルです。

「実存は本質にさきだつ」というサルトルの有名な言葉があります。例えばペーパーナイフのような「物」を作りだすとき、職人は行き当たりばったりでペーパーナイフを作るわけではありません。彼の頭の中には、どんな材料で、どんな形や大きさのペーパーナイフを作ろうか、というアイディア(=本質)があつて、それにしたがってペーパーナイフは

作られ（＝存在し）ます。「物」においては「本質」が「存在」にさきだつのです。

ところが、人間はどうでしょう。人間が存在するとき、ペーパーナイフのように、そこにあらかじめ「本質」があるわけではありません。（「神が人間を創造した」と考える場合は別ですが・・・。）人間とは、何らかの概念によって規定されるよりも前に、まず存在するような存在である。このような存在の仕方をサルトルは「実存」と呼びます。つまり、人間のばあい「実存は本質にさきだつ」わけです。人はまず世の中に出現（＝存在）し、その後にはじめて、人間とはこれこれの性質のものである、といえるのです。

考えてみると、これはとても恐ろしい考え方です。人間は何の理由も、何の意味もなく、いわば荒野の中にいきなり放り出されるような仕方での世に存在しなければなりません。すべての人間は否応なく、寄りすがるべきものを自分のうちにも、そとも見いだせない絶対的孤独の中で、ある日突然そこに存在する自己を見いだすのです。

しかし、サルトルは実存主義が絶望の哲学であることを否定します。「自由であるとは自由であるように呪われていることである」という言葉が示すように、絶対的な孤独は絶対的な自由でもあります。抛りどころもなく自由の中に見捨てられた人間は、純粋な主体として存在します。サルトルは「人間は、彼がみずからつくるところのものより以外の何ものでもない」とも言っています。絶対的な孤独を立脚点として、人間は主体的に（＝自らの意思で）自己をつくりだす存在なのだ、と解釈できるでしょうか。

人間は、善人にも悪人にも、聖者にも殺人鬼にもなれます。しかしそれは、サルトルの視点からは、人間とは何かという「本質」の問題ではなく、行為する主体としての「実存」に関わる問題です。自分が今の自分であることはすべて自分にもとづく。絶対的孤独から出発した人間は、主体として、つまり自らの意思で、今ある自分から新たな自分へと不断に進み続ける存在である。どうやらサルトルは、そうした人間のあり方に生の価値を見いだそうとしているように思えます。

親ガチャに話を戻しましょう。筆者がこの言葉を素直に受け入れにくいもう一つの理由は、「親ガチャ」ということば自体に、どこか自己否定、自己矮小（わいしょう）化の響きが含まれているように感じるからです。

どんな人間にも必ず親が存在します。人間が生物である以上、これは必然です。親にもまた同じように親がいます。その親にもまた親がいたはずです。こうした見方をすると、私たちは、生命の連鎖、途方もなく長い生命の連鎖の先端で、「現在」という一時点に現象化した存在である、とは言えないでしょうか。そして、その生命の連鎖の道のは奇跡に近い。疫病、食糧不足、戦乱、自然災害、度重なる生命の危機の中を力強く生き延びた命のつながりの先に、今の私たちは存在するのです。

はじめて父親になった日を覚えています。産婦人科の分娩室の廊下で、看護師さんからタオルに包まれた小さな生命をそっと手渡されました。ぎこちなく抱いた自分の腕の中で、生命はすやすやと無心に眠っていました。きっと私の親にも、そのまた親にも同じような経験があったはずです。もしも君たちが将来、人の親になったとしたら同じ経験をするのでしょうか。

「親ガチャ」ということばには、そんな生命のつながり、生命の意味を戯画化し、軽ん

じてしまう響きがあるように思います。そして、それは「親」だけでなく、その親につながる自分自身までも薄っぺらにしてしまわないでしょうか。自分という存在なんか、この程度に過ぎないよ、と。

心がつらいとき、親の言動がどうしても不条理に思えて受け入れられないとき、「親ガチャはずれた」と言葉にすることで、心を軽くすることがあってよいと思います。また、自我が大きく成長する第2次反抗期に、親や教師、大人たちのつくった規範や常識を否定したくなることも、心のはたらきとして自然なことです。

もしも20歳の人間が「親ガチャはずれた」と口にしたとしても、それはそれで認められるかもしれません。しかし30歳の人間が「親ガチャはずれた」と口にしたとしたら、おそらく社会は「親ガチャがはずれたあなたは、それでは自分自身の人生を30年間どのように生きてきたの？」と尋ねることでしょう。自分の人生に起こるさまざまなできごとの原因を、周りの環境だけに求めているとしたら、それは自分の人生を自分以外の何ものに委ねているということです。そこからは前に進むことはできません。

成長すること、大人になるということは、自分の人生を受け入れていくということです。それは決して自分の限界を見極め、あきらめるという意味ではありません。自分自身の人生に責任を持ち、選択し、行為し、新たな自分へと生まれ変わり続けていくということです。サルトル的な見方からすれば、それは孤独の行為なのかもしれません。しかし、人間をDNAを受けつぐ生命の連鎖の中にとらえるとき、別の見方をすることも可能だと思います。

君の人生の主役は、君自身です。君の人生を生きることは、他の誰にも委ねることはできません。あわてる必要はありません。少しずつ、少しずつ、生きる力を身につけていけばいいのです。